

阿蘇草原再生に関する意見交換会

「草原再生を支える都市・農村交流に向けて」開催記録

1. 趣旨

阿蘇の草原は千年の昔から、そこに住む人々が牛馬を飼い、草を利用した生活を営むために自然に手を加え、維持されてきた二次的自然である。そこには、阿蘇にしかないすぐれた景観と草原特有の多様な生態系があり、草原を利用し、維持していくための固有の文化が育まれている。

これまで、こうした阿蘇の草原は地元の方々によって維持されてきたが、近年は都市住民のボランティアによる輪地切り・野焼きの支援が行われる状況になってきた。また、草原を舞台とした自然体験活動や環境教育、農業教育等に対する都市住民のニーズも高まってきているものと思われ、草原を取り巻く状況が変化してきている。こうしたことを踏まえ、これからは、阿蘇の草原の維持に関して、恩恵にあずかる都市側からの積極的なかわりが必要であり、都市と農村が交流をより深めていくことにより、都市と農村が共に草原を支えていくべきではないだろうか。

こうしたことを踏まえ、本意見交換会は、都市と農村の交流・連携を進めていくための情報発信のあり方や、牧野を利用したエコツアーなどを具体化していくために必要なルールづくりについて、阿蘇に関わる多くの方々との意見交換を行うために実施したものである。

2. 開催概要

日 時：平成16年2月25日（水）

意見交換会／9：30～12：30

懇 親 会／12：30～14：00

場 所：ホテルサンクラウン大阿蘇 会議室

参加者：合計 77 名

＜検討委員＞

財団法人阿蘇地域振興デザインセンター事務局長	坂元英俊
早稲田大学教育学部教授	宮口侗迪
崇城大学講師	永田瑞穂
産山村上田尻牧野組合前組合長、阿蘇フォーラム委員長	井 信行
阿蘇ホテル社長	和田真幸
農林水産省九州農政局北部九州土地改良調査管理事務所次長	空野光治
熊本県阿蘇地域振興局振興調整室長	草野武夫
熊本県阿蘇地域振興局農林部農業振興課長	西山英樹

<ゲストスピーカー>

阿蘇自然案内人協会会長	高橋佳也
阿蘇フォーラム事務局長	宮本孝志
阿蘇テレワークセンター所長	高野勝則
農家れすとらん・民泊「田子山」経営者	小野聖子
財団法人全国修学旅行研究協会本部部長	山本精五
阿蘇町ホテルの会会長	湯浅陸雄

<一般参加>

国・県・町村	5名
関係団体	4名
牧野組合	20名
ボランティア・自然案内人	15名
その他一般	10名

<事務局>

環境省九州地区自然保護事務所

所長／新井正久、公園保護科長／番匠克二、保全調整専門官／山部勝章、

阿蘇自然保護官／佐々木真二郎

(財) 自然環境研究センター／ 宮川 浩、鈴木 隆

(株) メッツ研究所／ 枝松克巳、赤松達也、石原京子、角田理江

3. プログラム

時間・区分	内 容	会 場
第1部 基調報告 9：30～10：10	(1) あいさつ (2) 基調報告 農山村の人間論的価値と阿蘇の魅力 早稲田大学教育学部教授 宮口侗廸 <small>としみち</small> 氏 自然案内人が伝える阿蘇の草原と文化 阿蘇自然案内人協会会長 高橋佳也氏	会場A
第2部 交流分科会 (※) 10：15～11：35	<第1分科会> 「都市 農村交流の推進と草原再生に向けた情報発信」 (1) 報告 地産地消を軸とした都市・農村交流への期待 阿蘇フォーラム事務局長 宮本孝志氏 「阿蘇ファン」づくりの試みと反響 阿蘇テレワークセンター所長 高野勝則氏 ファームステイを受け入れて 農家レストラン・民泊経営者 小野聖子氏 (2) 質疑応答・意見交換	会場A
	<第2分科会> 「都市・農村交流への牧野の活用とルールづくり」 (1) 報告 環境学習提供者から見た阿蘇と草原利用への期待 (財)全国修学旅行研究協会 山本精五氏 牧野活用のための条件～「全国エコツーリズム大会 in 阿蘇」におけるトレッキングコース設定の事例から～ 阿蘇町ホテルの会会長 湯浅陸雄氏 (2) 質疑応答・意見交換	会場C
第3部 全体会 11：40～12：30	(1) ディスカッション (2) まとめ	会場A
懇親会(昼食会) 12：30～14：00	昼食・懇親会 草原再生に向けた関係機関のPR	会場B

環境省では阿蘇草原再生に向けた計画づくりのために、基本的な考え方や方針について議論していただく「阿蘇草原再生懇談会」、並びに、具体的な手法の検討や実証試験などを行う3つの検討部会を設けています。本日の意見交換会は、検討部会のひとつである「情報発信・合意形成に関する検討部会」の第2回検討会として開催するものです。

また、本日は阿蘇の草原に関わる多方面の方々をゲストスピーカーとしてお招きしております。

4. 議事録

第1部 基調報告

「農山村の人間論的価値と阿蘇の魅力」

早稲田大学教育学部教授 宮口侗弼氏

■ 他の地域との違い＝特徴を研究する地理学

私自身は地理学に携わっているが、地理学とは世の中のいろいろな違いが、なぜ違っているのかを考えることである。そして、その地域というのは他に比べてどんな特徴を持っているのかを追求することである。阿蘇は草原でできていることが特徴だが、草原のないところがたくさんあるからこそ特徴として成立する。それが地理学の基本精神である。



■ 日本の農村風景と人間性の共通性

日本はひたすら下を向いて田んぼを作ってきた。日本の最も基本的な農村風景は山があつて、山の下に家があつて、前に田んぼがある。山には木が生えている。何で、山に木が生えているかという、山はご飯のためには使わなかったからだ。裏山では薪を切り、落ち葉を拾ってきて肥やしにしていた。だから、みんなでおおらかに使う。

田んぼがいっぱいあると人間は同じタイプになっていく。1億人も同じような人間がいる国は世界に例がない。だから、日本人はおとなしくて物分かりがいい。ただし、今は日本人の人間性も変わってきたが。

■ 人の手で造られてきた阿蘇の風景の特殊性

阿蘇は山があつて、山の下に家があつて、田んぼがあり、山の下だけ見れば、日本の典型的な農村風景である。ところが、山には木がなく草原になっている。みんなが同じになろうとしてきた日本で、阿蘇は違ったことをやってきた。そしてそれは、人間がやってきた。自然が造ったのではなく、人間がそういうことをやってきた。それを、飯の種にしてきた。

■ 世界的にみると草原の農村もあるが、維持は放牧だけですむ

一方、ヨーロッパの農村は山が草原であり、阿蘇とよく似ている。ヨーロッパでは、畑で小麦を作るだけでは食糧が足りなかった。日本の田んぼの価値は、ヨーロッパの小麦畑の大体8倍ある。だから、ヨーロッパではひたすら家畜を増やして、山を全部牧草地にして、ようやく人口が増えた。ヨーロッパで草原が保たれやすいのは日本ほど雨が降らないからであり、野焼きをしなくてもいい。ひたすら、ここで羊を大量に放牧しておけばそれでいい。地球の中には、こうやって山に木が無いのが当たり前という世界もある。

■ 水田化・工業化・都市化の流れから個性化へ

いかにみんなと同じになろうとしてきたかというのが日本の歩みである。それが、田んぼを

作り、ある時期からひたすら工場を造り、ある時期から都市化を進め、都市へ人間が押し掛けるという流れを生んだ。周りと一緒にになると、それだけで安心してきた。しかし、バブル経済のころから、人間はみんな一緒になれないということが、ようやく多くの人に分かってきた。

そういう時代に、田舎のほうがいいのか、ここで百姓をやっているほうがいいのかという人が、ようやく出てきた。それまでは、村へ行けば町より劣る、小さい市は大きい市より下なんだという意識が日本人の中にあった。地域を生かして、地域オリジナルにいい状態をつくる価値が、ようやく日本人に分かるようになってきた。

こういう時代に「地域づくり」が始まった。その時代に、全国総合開発計画で「多自然居住地域」という言葉を作った。都市が発展する原理と、村がいい村になる原理は別である。村のほうは人間はたくさん要らないのではないかな。少ない人間でうまいことをし、そこに都市の人が遊びに来る。定住人口が増えるよりは、少ない人間でうまくやるほうが利口なのではないかというのが私の考え方である。

■ 阿蘇はその成り立ちから本来的に個性的で貴重な空間であり、人のワザにより感動を生む

そのような発想で見ると、この阿蘇の牧野というのは、日本の中では本来的に個性的な空間である。人が自然を使って造ってきた、我が国では非常に貴重な風景である。しかし、ここに家畜が1頭もいなくなって、単に人間が無理して草原を維持しているだけだとつまらない。その草原というものが、家畜の生きる場になって、それが回り回って人間生活を支えているのだということが連想されるから、その草原に価値があるのではないかな。

農山村というのは、基本的に自然と共生する中で生命を育む場である。ただの、都市の中にある公園とは違う。そこから、人の巧みなワザが連想されるから都市の人は感動する。都市の人が歌舞伎や演劇を見るのと同じように、農山村を維持している人を見て感動する。美しい農村とは、ちゃんと自然が使われていて、人の動きというものがそこから連想できる場である。

都市の人も勉強する。勉強すればいろいろ連想できるようになる。何も勉強しない人には価値は分からない。勉強して初めて分かるようになり、いろいろなことが連想される。人がそこに温かさとしみじみを感じる。そして、人間が少しいい人間に、高級な人間になれると思う。

■ 複合的な農業の工夫・ワザが現代の農業の価値を生む

阿蘇では家畜を飼ったり、いろいろな農業をやられているが、その農業のやり方というのはいろいろ工夫があると思う。人に見せるような農業であってもいいし、食べさせるような農業でもいい。見せたり、食べさせたり、遊ばせたりするいろいろなワザが、複合的にそこに存在するのが現代の農村の価値だと思う。

■ 交流の推進によって地元の人も成長を

地元の人が、「俺たちは俺たちでいいんだ」と、頑固に全然変わらないでいたら、そのうち世間からそっぽを向かれる。現代にふさわしいような付き合い方が、ちゃんとできていってほしい。交流を通じて刺激しあって、「おい、東京から来た人が、この間、こんなふうな農業をやったらどうだなんて生意気なことを言ってたけど、あれはやはり考える余地があるなあ」ということが結構あるはずである。要するに、違った目を持っている人は、違ったことに気が付く。そういうことをお互いに吸収するのが、交流による成長だといえる。

「自然案内人が伝える阿蘇の草原と文化」

阿蘇自然案内人協会会長 高橋佳也氏

■ 阿蘇のすばらしさをプロが案内をするため立ち上げた自然案内人協会

今まで、たくさんの方が阿蘇に来られたが、たいてい駆け足で阿蘇を通り過ぎていくという、通過型の観光が多かった。しかし、阿蘇にはもっと素晴らしい、秘められた財産があり、そしてそれを訪れた人に案内する必要がある。

一方、これまで地元の間人がいろいろ案内をする機会があったが、全部ボランティア的な案内人であった。ここが阿蘇の本当の魅力なんだというところ、その素晴らしい阿蘇を皆さんに感じてもらうためには、やはり専門家としての案内人が必要であった。公的な組織を持った人たちが阿蘇を案内して、阿蘇の素晴らしさをぜひ皆さんに知ってもらいたいという願いがあった。そのため、プロの養成、後継者の養成、各人が今持っているそれぞれの知恵を将来に残していってもらいたいという観点から、阿蘇自然案内人協会が立ち上がった。現在 34 名の方が実技に携わるということで、研修を深めている。来月も研修会を開くということになっている。



■ 阿蘇の草原文化をエコツーリズムの中に生かしたい

阿蘇には草原に育まれた文化があり、その文化をぜひ伝えていきたいという思いもある。そうした草原の文化の大切さを、エコツーリズムの中で生かしていきたいと思う。

■ 巻狩りを生んだ武士の文化

阿蘇の文化を考えると、まず、狩りの文化があった。阿蘇のすそ野で「下野の巻狩り」という、壮大なドラマが行なわれていた。今後、この阿蘇の巻狩りというのがどういうふうなものであったかということ、知らしめたいと思っている。

■ 阿蘇の神様～健磐龍命～

阿蘇を開いた神様ということで、健磐龍命というテーマがある。それから、それを後継していった速瓶玉命、健磐龍命の家来の鬼人という非常に個性の強い神様の造反劇も文化の 1 つである。

■ 小説、伝説に示される阿蘇の文化

滝沢馬琴が書いた「椿説弓張月」という小説にも阿蘇のことが書かれている。白縫姫と為朝の伝説というのがある。これは高城といい、この東外輪のところにその城跡があったとされている伝説で、為朝伝説はどこにでもある伝説なのだが、その 1 つだけが阿蘇に残ったということも大事な文化ではないか。

■ 坊中に示される仏教文化

草千里の先のほうに、古坊中がある。たくさんのお僧侶、行者、山伏たちのお寺である。天台

宗比叡山の末寺になるのだが、衆徒坊が 20 坊、行者坊が 17 坊、それから 51 の庵があり、合計 88 の寺社がそこに存在していた。これほど大きな文化はないと思う。これらは島津・大友の乱で焼き討ちに合い、結局麓坊中となったが、麓坊中でもやはりかなりの人がずっと行き来していた。そこから生まれた文化も大事だ。

■ 能の文化

芸能的な面から言うと、能の伝統が残っている。高砂という能の謡いの中にも出てくるが、「肥後の国の神主、友成とはわがことなり」という言葉から始まる能楽がある。お祝いの時には必ず出てくる日本の謡曲の代表的なものである。上演するのは 1 時間余りかかるような能なのだが、こういう芸能もある。

■ 虎舞、牛舞といった伝統芸能

また、虎舞という、特殊な舞がある。この虎舞は、もともと獅子なのだが、阿蘇神社に同じ獅子舞があるので少し心配をし、虎の舞いという名前で獅子舞を伝承している。阿蘇町のほうで伝承しており、最近は小学校でも学習の中に取り入れている。草原の中で、農業の中で生まれてきた、豊穰を祝うための舞いである。それから、牛舞がある。この牛舞というのも、農耕につながるの深い継承である。

交流に活用できる文化が、阿蘇にはたくさん息づいている。自然と共にこれらの文化も案内していきたい。

第2部 交流分科会

第1分科会「都市・農村交流の推進と草原再生に向けた情報発信」

(1) 報告

報告1 「地産地消を軸とした都市・農村交流への期待」

阿蘇フォーラム事務局長 宮本孝志氏

■ 地産地消を進めるための地域連携システムの必要性と「阿蘇フォーラム」「阿蘇リーグ」の立ち上げ

阿蘇のこれからの地域づくりのためには、行政、営利団体、非営利団体3者が対等な立場で参加できる地域連携のシステムをつくる必要があった。

「阿蘇フォーラム」は、地域内の各非営利団体のゆるやかなネットワークを形成することを目的に作った団体で、会費も徴収せず、その時々活動にあわせ、ネットワークを形成し活動するものである。

「阿蘇リーグ」は、平成14年に「阿蘇広域観光と地域づくり連絡協議会」として発足し、統一テーマとして「地産地消のツーリズム」を掲げている。観光業界、商工会、農業団体、税理士、地域づくり団体が参加していて、「阿蘇フォーラム」は地域づくり団体の中に含まれる。「阿蘇リーグ」には、①農業開発委員会、②広域連携委員会、③情報・交流委員会があり、各委員会が手分けをしがら、また手を結びながら阿蘇全域での活動を目指している。

■ 「阿蘇フォーラム」「阿蘇リーグ」での都市・農村交流の試み

「阿蘇フォーラム」では毎年秋に「阿蘇の食と農」をテーマに「阿蘇フォーラムまるごとフェスタ」を開催している。地元で都会からのお客様を迎え、交流している。1日目に「阿蘇自由学校」と称する勉強会と交流会・夜なべ談義、2日目に、阿蘇で収穫された農産物等を紹介する「阿蘇見本市」が開かれる。このフェスタを通して、新しい出会いが生まれたり、若手スターが誕生したりしている。

「阿蘇リーグ」では、地域のほうから都市に出向く「阿蘇まるごとフェスタ in 博多」を開催している。競争相手が集まる都市で開催することによって、大都市から見た阿蘇の特徴や売り方を、出店者である阿蘇の人たち自身が考えることができる。また、博多の方たちには、阿蘇は観光地でもあるが、農産物を供給する場でもあるということを知ってもらうよい機会にもなっている。

■ 地域づくりの原点は子どもを育てること

「阿蘇フォーラムまるごとフェスタ」で行われる「阿蘇見本市」の会場では、子ども芸能や文化を紹介するための地域の昔遊び体験も行う。子どもが登場するとみな喜ぶ。地域づくりのいちばんの原点は、子どもを育てること。それを大人が見守ることにある。

■ 阿蘇型の循環型地域システムの象徴として草原を捉える

阿蘇の草原は、千年以上の間続く暮らしや文化が、目に見える形になって残っているもので

もある。それらは、何千年の間農業を軸に築いてきた循環型社会の上に成り立っているともいえ、「阿蘇モデル」として世界に発信できると思う。

ただし、昔の暮らしを続けることは無理が生じる。農畜産の面からだけでなく、資源、エネルギーの面からも、阿蘇の草原を見直していくことが必要である。

報告2 「『阿蘇ファン』づくりの試みと反響」

阿蘇テレワークセンター所長 高野勝則氏

■ 地域内外の情報交流に積極的に取り組む「阿蘇ファンクラブ」

「阿蘇ファンクラブ」は、「阿蘇リーグ」の中の情報・交流事業委員会が運営しているもので、その役割は、イベントのPRと、ネットを使った情報発信である。運営委員会はなく、阿蘇フォーラム事務局長やデザインセンター、テレワークセンター、商工会などで役割を分担して、自分たちができる範囲内でボランティア的に活動している。現在は、「阿蘇リーグ」で行っている地域との交流やファンづくり、受け皿づくりなどを、インターネットでどのように情報発信していくかについて検討している。



■ “地産地消の情報発信”にむけた取り組みが始動、予想以上の反響も

情報発信も、地産地消。地域の人がホームページの作成に携わり、地域活動と密着して、常に活動と連携した情報発信やコンテンツづくりをしなければならない。具体的には、阿蘇の観光資源や自然食品などのデータベースの作成に、阿蘇フォーラムの人たちを中心に資料を提供してもらうなどしている。

このほか、去年は草原を守る意味を込めて、あか牛を1頭買ってもらう企画を立ち上げたところ、予想を上回る100人近くのあか牛のファンから申込みがあった。今後は苺などの物産も手がけたいと思っている。このほか郷土料理のレシピが掲載されている専門サイトや、農家レストランの特集などが出来あがりつつある。

■ おもてなしとIT技術の融合にチャレンジ

ルナ天文台のペンションで、おもてなしの顧客管理システムソフト（「おもてなし」というオーナーが長年取り組んできたものを組み入れたソフト、いわば技術的なものの中に心を入れようというもの）の開発を実験的に進めている。

■ 地域情報の共有化や情報窓口の一本化の取り組み

地域内の情報の共有化を図る試みとして、阿蘇町観光協会では、宿泊施設や公共施設などに、お客さんや地域住民への情報を提供する端末を30台設置する。また、南阿蘇では宮本さんを中心に体験窓口の一本化に、阿蘇町観光協会でも窓口の一本化に取り組んでいる。これらの動きに合わせて、双方向型の情報発信を行えば、さらに有効な情報発信ができると考えている。

■ 情報発信のためにも地域コミュニティ・ネットワークの拡大を

阿蘇フォーラムの活動内容など地域の情報を発信するためには、地域のコミュニティ・ネットワークをどう拡大するかが重要になってくる。

■ 学校教育の現場に草原問題や環境教育を

地域再生や草原・環境問題は、学校教育の中で子供たちに上手く伝えていくことが重要である。環境省の事業にも、小中学生向けの教材の開発や情報提供システムの構築というものを取り入れていただければと思う。予算が計上されれば、「阿蘇リーグ」など地域に密着した人たちが一緒に考えていくことができる。

報告3 「ファームステイを受け入れて」

農家レストラン・民泊経営者 小野聖子氏

■ 農村や農家を理解してもらう方法としてファームステイに取り組む

草原を活用した畜産経営を続ける中で、都市と農村の関係、農家としてのグリーンストックやグリーンツーリズムの重要性などを徐々に感じ取れるようになってきた。しかし、農業政策への不満や安定しない農作物の価格など、不安はつきまとう。そこで、農家だからできる農業、農村や農家を理解してもらう方法として、ファームステイの取り組みに参加した。

農家での宿泊は、都会の子供たちにとって初めてのことで不安もあったが、実は受け入れる私たちも最初は緊張と不安があった。

■ 農作業も子供たちには驚きと感動の連続

都会の子にとっては、農村の自然、時間、人とのふれあいなどすべてが新鮮で驚きの連続であった。例えば、夕食の焼き肉に添える大根おろし用の大根を、皆で畑に大根を引きに行き、土に深く入り込んでいる大根を引こうと四苦八苦して、抜けた時には大声で「抜けた」と笑い、途中で折れた時には大声で「折れた」と笑う。おろしダレも大根おろしも美味しいと子供たちは喜んでいて。きっとこの味は、長く忘れないと思う。

また、子供たちは事前に学校で阿蘇の特長や産物、歴史などを勉強していて驚かされる。

■ ファームステイ受け入れ側も新鮮な経験に喜びを実感

子供たちからは、いつもたくさんのお礼状が届く。読んで思わず笑ったり、「ほかの子はどうしているかな」と心配になったり、受け入れる私たちも子供たちを通じて、いろいろな経験や体験ができる。

■ ファームステイ効果は受け入れ農家のみならず町周辺にも及ぶ

阿蘇町でのファームステイのために、年間約2,000名が阿蘇町を訪れており、その経済効果は、農家だけではなく町周辺にまで及んでいる。今後は農家の負担にならないように、短時間の体験から、子供たちが伸び伸びと体験できるような「丸ごと農家体験」の時間と場所の提供も必要である。

■ 安心して提供できる食材づくりのためにも農家のネットワークづくりが大切

子供たちに安心して提供できる食材づくりのためには、私たち受け入れ農家のネットワークづくりや、食と農の情報発信の場が大切だと思っている。

(2) 意見交換会

参加者 A

- ・ 都市と農村の交流を目指す NPO 法人の活動で、都市の子供を阿蘇に招いたキャンプを実施している。例えば、小学校 1～3 年生の子供たちを対象にし、久木野久石地区の老人会にご協力いただき、子供たちをお年寄りのお宅にお使いに行かせている。子供たちに与える課題は「お手伝いに行く」だが、本当はお年よりの知識や生活を都市の子供に見てもらえることができればと思っている。
- ・ 子供の頃から農村と交流し、子供の頃から都市と農村のつながりを認識させることが必要だと思う。

参加者 B

- ・ 阿蘇の下流域には、元気で何かやりたいと思っているお年寄りが大勢いる。その人たちの力を引き出すための情報発信のやり方を考えてもらいたい。今日はたまたまこの会のことを知って仲間とやってきたのだが、われわれの方はアンテナを伸ばしていても、阿蘇からの情報がうまく伝わってこないのが現状である。
- ・ 人のため、自然のため、環境のために何かをやるには資金が必要。地域づくり団体等をせっかく立ち上げても、10 年後にはなくなってしまう、その責任を誰も取らないという状況になってしまう可能性がある。地域づくりにもコスト意識を持ち、5 年後、10 年後のグランドデザインを描くといった企業の考え方を導入すべきである。



宮本氏

- ・ 地域経営の考え方は重要で、行政や、民間営利団体だけでなく、「阿蘇フォーラム」のような非営利団体も含めてやっていかなくてはいけないし、その活動資金は自分たちで作らなくてはならないと思っている。

参加者 C

- ・ 農業をとりまく環境は厳しくなるばかりで、野焼きもボランティアの方に手伝ってもらえないとできない状況になっている。特に後継者問題は深刻で、空き地が増え、地域の高齢化が進んでいる。
- ・ 牧野への協力の気持ちを込めてこういう会合を開いてもらうことは、我々としてはとても光栄に思う。今後も、ボランティアの方に協力してもらいながら草原を守っていきたい。

井委員

- ・ 人間をつくる、子どもを育てるという場所は、水がきれいで自然が豊かな過疎の村である。実際、阿蘇に来て生活をしたことで不登校が治ったり、アトピーの症状がやわらいだりした人もいる。これからが農山村の出番だと思っている。
- ・ 情報は、村に住む人たちから発信しなければいけないと思う。そのためにも、住む人が誇

りを持ち、役割があるということを考えながら暮らすことが重要だと思う。

宮口委員

- ・ 都会に住む人が、生活のために収支のバランスを考えるのは当たり前だが、高度成長期以降の日本では、農家の人たちも結構お金だけで物事を考えるようになってきた気がする。
- ・ そうした意味で、井さんの発言はうれしい。お金でない価値は、人とつきあわないと分からない。

永田委員

- ・ 設備投資などにお金をかけて失敗をした農家の方が大勢いるが、悩み苦しみながら、地域で試行錯誤してやってきた農家は生き残っている。
- ・ 現場から情報発信するには、住んでいる人が阿蘇の良さを納得し、そしてそれを自分の言葉で伝えることが大切である。
- ・ 皆さんが非常にいい方向に向いてきているので、「10年後に無くなる会社」にはならないのではないかと、10年後にはもっと違った大きいものになっていると思っている。

参加者D

- ・ 昔花嫁だった農家の主婦が、もう一度元気になれるよう「近くて、短くて、たやすい」ことを何かしたいと思い、女性7人が集まって「農花の会」を立ち上げ、農業を通じた交流などの取り組みを始めた。
- ・ お金は入らないが、まずは農業の現場をお客さんに見てもらい、野菜など食物への理解を深めてもらいたいと思っている。

参加者E

- ・ 阿蘇の魅力としては、火山の魅力、雄大な景観、草原の美しさの3つがあげられると思う。その中で、1800万人の観光客をより多く阿蘇に滞在させて体験活動できる受け皿や仕組みを整理し、再編する時期にきた。それが環境（エコロジー）と経済振興（エコノミー）を調和させていく、環境地域づくり時代の始まりではないかと思う。

宮本氏

- ・ 阿蘇の価値、阿蘇の見せ方は、外からではなく内からの発想や知恵から生まれるものであり、外からお客さんをたくさん呼び込み、どうお金を落とさせるのかを考えるのではなく、地元で取り組んでいる人たちをどう応援していくかという視点が欲しい。
- ・ 阿蘇での過ごし方の満足度を高めて、繰り返し来てもらい、ゆったりと過ごしてもらい、感動してもらえば、観光客の数は減っても良いと思っている。
- ・ 地域は簡単に変わっていいものではない。変わらなかったからこそ、千年も草原が残ってきたわけである。本当は、今、何もしないほうがいいのかもしれない。歴史や文化などもっと大きな意味から地域の利益を感じることを、地元の人たちが駄目だと言うことを尊重するということが大事ではないか。

参加者F

- ・ 自分は専業農家ではなかったが入会地を利用して1頭の牛を飼い始め、今日まで畜産も続けながら生活をしてきた。これまでの経験からも、私は地元の土地で畜産をやって十分にお金を稼いでいけると思っている。

第2分科会「都市・農村交流への牧野の活用とルールづくり」

(1) 報告

報告1「環境学習提供者から見た阿蘇と草原利用への期待」

(財)全国修学旅行研究協会本部部長 山本精五氏

■ 教育現場で注目されている環境学習

私どもが以前から取り組んでいる環境学習旅行というプログラムがあるが、今日は、それを進めている者として、阿蘇に期待することなどをお話します。

昨年から、学校の教育課程が変わり、総合的な学習に時間を取れるようになった。一方、「21世紀は環境の時代」と言われているように、環境というテーマは、非常に大きなテーマとして位置づけられている。そうした中で、学校のいわゆる特別活動と言われる修学旅行、校外学習に環境を取り入れたものは、大きく注目されている。

■ 「周遊型」から「滞在型」へ、「観光見学型」から「体験型」へ、変わる修学旅行

以前の修学旅行は、周遊型といういわゆる点から点を渡り歩く修学旅行で、この辺の地域は完全にワンパターンであった。別府で地獄巡りをやって、やまなみハイウェイをバスで、中で歌でも歌いながら上がり、草千里に行き、中岳の火口を見て、それで大体阿蘇に一泊。翌日は熊本へ出て、水前寺公園と熊本城を観光して、それから天草とか島原のほうへ向けていく。最後の目的地が長崎。あるいは、その逆のコースという、まさに周遊型のコースであった。

しかし、15～16年前にすでに阿蘇の修学旅行者数が減少を始めた。減少を始めたということは、学校にあまり支持されなくなってきたということである。その要因は、学校の修学旅行における目的が「周遊型」から「滞在型」、「観光見学型」から「体験型」に変わってきたからだ。

■ 阿蘇での体験型観光づくりへの試行

阿蘇への修学旅行生が減り始めた時期、私は阿蘇の旅館の皆さんとお付き合いが多く、申し上げたのは、「いつまでも中岳と草千里はもうやめましょう。阿蘇にはこれだけの世界有数のカルデラという素晴らしい資産があるんですから、この中を体験してもらおう。そのためには、阿蘇の中に滞在する時間を多くして、この中でネイチャースポーツやいろいろな体験をしてもらって、満喫してもらおう。そういった旅行に変えましょうよ」ということだった。最初は阿蘇の方が一番分かってなかったが、徐々にネイチャーセンターを立ち上げてもらったり、地元も私どもも大変な思いで進めてきた。

■ 6年前、安全管理がネックになって実現できなかった草原体験プログラム

6年前(平成10年)に、阿蘇で環境学習旅行プログラム「阿蘇の牧野を利用したプログラム」をつくらせていただいた。ただ、この中で、私がどうしてもやりたかったけれどもできなかったのが、草原の体験である。この阿蘇の人間がつくった大草原を何とか子どもたちが体験する方法はないかと。しかし当時は、安全管理の部分で、実現できなかった。草原には急斜面があり、いろいろな危険もある。また、カマを使うということがネックになった。

■ 6年前に比べ学校も受け入れ側も、大きく変わる

その6年間で、今、学校の姿勢もずいぶん変わってきた。生徒が小刀を使えないのを、見直そうとしている。また、滞在学習に関して、特に農業関係で、今や47都道府県全部がパンフレットを作って、「修学旅行はうちに来て体験をやってください」という時代になった。稲刈りをやるのであればカマを使う、枝打ち体験をやるのならノコギリを使うようになり、学校の安全に対する忌避が、かなりゆるくなってきている。

■ 課題はルールづくりと受け入れ窓口の一本化

課題としては、ある一定の学校の体験学習を受ける以上、ルールづくりが必要なこと。そのルールづくりの中の1つに、受け入れ態勢、窓口の一本化がある。現場でばらばらにおやりになっているところに、個々に連絡を取って打ち合わせをするのは現実に無理である。どこかが受け入れの窓口として担当していただき、そこで、極端に言えば、体験のツールの作成からインストラクターの手配、農村民泊の配宿、安全管理の面までやっていただいて、それで、いろいろなところから来る皆さんに対応していただいたほうが、より支持は高まるし、ほかの地域の成功事例でも、そういったところがやはり一番学校に安心して来ていただいている。

■ 一般にも大きく支持される環境学習プログラム

環境学習のニーズに関しては、学校と一般という区別はほとんどない。環境学習旅行プログラムを作成して、発表したとたんに関心者が来るのは、ほとんど一般からである。自治体の生涯学習課とか、一般企業から「うちの会社もISOをやっているので、おたくのプログラムを体験させてくれ」とか、学生のサークル旅行とか、家族連れで体験をしたいといった問い合わせである。こういった体験プログラムは、学校のみならず、いろいろな人々から支持され、希望されるというのが、今の時代ではないか。

■ 阿蘇に望む景観の整備

阿蘇にお願いしたいのは、景観の整備である。阿蘇は外輪山のカルデラの中に、鉄道が通って国道が通って、人が7万人住んでいる。こんな所は世界中、どこを探しても無い。それをもう一步進めるには、カルデラの中から、看板類を一切撤去したらどうか。いわゆる景観というものを、人々がみんなでつくる。また、そういった内容が世界中の人に好まれている。

アジアの国というのは日本も含めて、今まで景観というものには大して力を割いてこなかった。原色の看板が大好きで、看板が乱立して、新幹線の駅前から何から原色だらけ。ところが、例えばフランスのパリの旧市街などというのは、地域の人が制限を加え、協力し合うことによって、良好な景観を持ち得ている。そうしたことを、今、世界中の観光客が一番支持するところだ。

私は昨日、飛行機で阿蘇の上を飛んだとき、「やはりこの景色というのは世界にうけるな。これこそが景観なんだな」というふうに認識した。ぜひ、こうした景観整備というものも含めた中で、阿蘇での環境学習を進めていただければと思う。

報告2「全国エコツーリズム大会 in 阿蘇」におけるトレッキングコース設定の事例から

阿蘇町ホテルの会会長 湯浅陸雄氏

■ 「素晴らしい」という反響を得た、牧野内のフィールド

昨年（平成15年）の10月17～19日に、「全国エコツーリズム大会 in 阿蘇」が開催され、私は南小国町の長者川、マゼノ溪谷、押戸石山を案内させていただいた。その前の6月に下見をさせていただいたが、そのとき、地元の方も一緒にみえた。地元の方はいつも見慣れている風景ということで、自分たちのふるさとに全く感動されないとのことだった。私たちはこの秘境にびっくりしたわけだが、大会が終わった後、参加者にご意見を聞きいたところ、やはり「これだけ素晴らしい所はない」という反響であった。それを、地元の方にお伝えしたら、やはりこれは開放して生かすべきかということ、真剣に考えていただくようになった。



■ 案内の適正人数・仕方、安全性への配慮、マナーの確立など、見えてきた課題

案内人の人数としては、今回の全国エコツーリズム大会に合わせて対応したかたちで、不備な点もあり、また案内不足もあったと思う。それから、道に危険な箇所が少しあり、後で参加者にお尋ねしたところ、「ここままにしておくほうがいい」と言う方が半分、「もう少し手を加えて、歩きやすくしたらいい」という方が半分であり、今後は、自然に手を加えないことを重視するか、安全性を重視するかという点も課題になる。自然案内人協会でもさらに勉強を続けて、人の移動、危険性にも十分考慮しなければ、現場での余韻が残らないのではないかと気づいた。また、あまり案内する人数が多いと、案内人より先走って行って、自分勝手なことをされるということも分かった。こういうことから、マナーの確立も大きな検討の課題といえる。

■ 必ず必要な牧野組合による許可

歩いた道を振り返ってみると、マゼノ溪谷という所は3つの牧野が境界をなしているので、3つの牧野に許可を取らなければならない。牧野は、今までは農家の方たちが農作業のために利用されていたが、これをエコツアーに使うことになれば、必ずきちんと許可を取っておかなければならない。

■ 牧野立ち入りのルールと条件

また、牧野に立ち入るには守るべきマナーや条件がある。①牧野には牛が脱牧しないように門扉があるが、これを開けっ放しで行くと牛が逃げだすので、きちんと閉めていくこと。②牧野は牧草地なので、車を乗り入れてはいけない。③空き缶や空きびんを捨てる大変なことになるので、持ち帰りをきちんとさせる。④湿地には貴重な植物もあり、湿地に踏み込んでしまうと草花が生えてこない「踏み込み現象」を起こすので、湿地には足を踏み込まないこと。⑤もちろん、牧場内に自生している植物などの採取は固く禁じなければならない。

それから、最終的には牧野を利用させていただく上において、何らかのかたちでお礼をすることによって、牧野側にメリットを提供してあげるということも必要だ。こうしたルールや条件を整備することによって、情報が動き、今後の新しい牧野活性化の形ができるであろうし、

牧野を利用させていただく都会の方々の、素晴らしい癒やしの場になるのではないだろうか。

■ まだまだ知られていない牧野内の秘境。エコツアーへの活用による牧野活性化へ

阿蘇町のある牧野組合でも、昨年からトレッキングコースづくりをさせていただいている。以前からこの牧野の方から「何とか活用してくれんか」と申し出もあり、調査したところ、阿蘇が爆発して9万年前に出来た溶岩の石畳が約2km続いており、阿蘇にはまだまだ知られていない秘境があるのだということを深く痛感した。今後、そのようなことを踏まえ、牧野の活用とエコツーリズムというのを、もう少し結びつければ牧野も助かるし、また都会の方々の心の癒やしにもなるだろうと感じている。

(2) 意見交換会

参加者A（牧野関係者）

- ・ 私たちの原野は農業法人にして、全部、個人の財産になっている。自分たちの財産と思えばこそ、守っていくし、何かできるのではないかと思う。
- ・ ほとんど牛がいないので、今は野焼き、輪地切りといった維持関係だけをやっている。
- ・ 草原への立ち入りに関しては、牛の心配も無いから、全面的に開放している。なるべく観光にいらした方を受け入れ、対応していきたいと思っている。
- ・ ただし、問題は野草を採る方がいたり、牧野内にゴマシジミという貴重なチョウが生息しているが、それを捕る人があとをたたないこと。注意しても聞いてくれない。

参加者B（牧野関係者）

- ・ かつて、行政の手引きによって急斜面に杉を植林したが、祖父が心配していたとおり20年目に水害にあい、杉も倒れてしまった。これは天災でなく人災だ。また、植林のせいで防火帯を造ったが、このせいで野焼きも困難な作業になった。
- ・ 阿蘇の農家には改良草地を維持管理する能力すらなかった時代に、行政の手引きで大規模土地改良事業を行い、農家は莫大な赤字を作った。それに対するフォローもない。
- ・ 草地に家族連れが車で来るが、おむつやビン・カンが置きっぱなし。バーベキューをしたあとの石も置きっぱなし。100馬力トラクターで作業をしているが、そういう石があったら機械は一発で壊れる。修理代だけでも100万円かかる。したがって、畜産農家としては草地に人が入ることは一番嫌で、都市から人は来てほしくない。

参加者C

- ・ Uターンしてきて外からの視点で阿蘇を見られるようになったが、地元の同世代の仲間は観光客以上に阿蘇のことを知らない。
- ・ 地元のNPOで、馬の治癒効果を生かして不登校児の心のケアに取り組んだり、小学校6年生に乗馬体験をさせている。来年からは総合学習に取り入れてもらうことになっている。
- ・ 地元で育っている人が自分の地域のことを知って、なおかつ、そこに誇りを持つことが1番大事なことだと思うので、感受性の高い小学生の頃から野焼きの見学・体験等に積極的に関わらせていくべきだ。

参加者D（牧野関係者）

- ・ 中学校の修学旅行生を受け入れ、草原の成り立ちを説明したあと輪地焼きを体験させた。草を集める集め隊、火を付ける火付け隊、火を消すための消し隊に班分けして、皆一所懸

命に取り組み、充実した時を過ごせた。

- ・ ただ、このときはボランティアだったので、組合員に対する資金面での援助が欲しい。

参加者 E（牧野関係者）

- ・ 修学旅行生を受け入れて、もう 7 年目ぐらいになるが、事前学習をしてくる子供としてこない子供とでは子供の目つき、理解度が全く違うので、ぜひ、来る側は事前学習をきちんとしてきて欲しい。

参加者 F

- ・ ミルクロード辺りで平気でゴミを捨てる若者には非常に腹が立つ。
- ・ 一方、阿蘇に山小屋を持っている関係で周辺をよく散策するが、ちょっとした谷川に、農業用のビニール、冷蔵庫、洗濯機、テレビ、自転車などが捨てられている。
- ・ 都市の人間に限らず、農村の人間も環境を大切にするという心構えが必要だ。

参加者 G

- ・ 野焼きに関する昔からの知恵として、雪焼きがある。これは、例えば古野を焼こうとした場合、まだ、雪の残っている時期に数回に分けて野焼きを行う。雪が積もっているので、延焼の心配がなく、作業も楽である。これは 65 歳以上の人でないと知らない。
- ・ また、昔は夜の野焼きをやっていた。夕方 6 時から 9 時くらいまでの間でやる。夜のとばりが下りると湿気が下りて火も穏やかだし、飛び火もすぐ見えるし、もっとも安全な仕事だ。ただし、今は消防法の許可が下りず、できない状態になっている。

参加者 H

- ・ 草原に輪地切りを兼ねた迷路を造って、人を歩かせたらたらどうか。春、夏、秋、冬の草原の変化する姿を観察し、牧野組合の方の苦労を知る機会とする。
- ・ 牧野に入るルールについては、宿泊施設で教育する。もちろん入場料は取って、草原再生への費用に充てたらどうか。

和田委員

- ・ 私は今ちょうど 50 歳だが、私が小さい頃見た阿蘇の景観は、大輪山の壁は草原だった。そういう景観が原点にある。
- ・ 自然体験の会社をやっているが、キーワードは「高い空と田園と草原」。高い空は、パラグライダーや熱気球で楽しんでもらっており、田園も農業体験としていろいろやっているが、草原は今のところ景観でしかない。
- ・ いろいろなルールが必要だと思うが、今日出たお話を伝えること含め、草原を体験の場として活用していくことが観光の 1 つの切り口になると思っている。草原の再生というものを観光という観点からチャレンジしていきたい。

参加者 B（牧野関係者）

- ・ 草原維持は机上論ではいけない。野焼きというのは、昔は夜に焼いていた。昔は阿蘇の外輪山の下から火を付けて終わりだった。
- ・ ところが、森林開発をやり、野焼きが難しくなると共に、景観も変わってしまった。「千年の草原の景観」と言われるが、私自身、背中に冷や汗をかいてしまう。
- ・ いろいろな立場の人が、草原を大事にしたいという気持ちは分かるが、やはり昔の知恵を生かして、机上論ではなく取り組んで欲しい。

第3部 全体会

- ※ 最初に、宮口委員から第1分科会の報告、坂元委員から第2分科会の報告（省略）。
- ※ 以下、分科会に参加して気づいたことや意見について委員からの発表、並びに参加者からの意見



井委員

- ・ 農山村に住んでいるのに、農山村ならではの豊かさや役割を知らない人が多い。まず、住む人の中で、農山村の豊かさを味わっていく人たちが増えてくれば、おのずと元気が出る村になってくる。
- ・ また、農山村の豊かさが、都市住民に知られてない。だから、自分たちが都市に出て、村を知っていただく。そして、自分たちの村に来ていただく。そういうことを身近に、地域に住む人たちから始めていくことが必要だ。
- ・ その際、そこに住む人たちが優しい言葉で、思っていることを、知らせていく。それが、都市と農村をつなぐパイプ役ではないか。そのことによって、村に住む人たちはすごくいろいろな役割を担っていることを自覚し、そこで暮していくことに、お金だけではない価値がたくさんあるということを知覚していくのではないか。
- ・ しかし、お金も必要であるから、生き生きとして住む人がたくさん増えてくれば、必ずそこから、「どぎゃんして生活してやろうか」ということを考えていくと思う。そういうものを、都市と農村で作りに上げていく、そのために都市に向けた情報発信をする。そうすれば、必ず、村は再生されていくし、阿蘇のすばらしい自然は、残されていくと思う。

永田委員

- ・ 人を集めようとした時、自分も参加しながらおいしい料理を作るとか、そういった「行動」「体験」が伴わないと、なかなか人はやってきてくれない。
- ・ ある地域に長年関わっているが、そこに1～2度来た人は、地域のことはもう分かったからと皆来なくなる。それでは、本当に分かったのかというと、もちろん分かっていない。
- ・ そこで、地域で昔からやってきたことをその通りやろうという活動を始めた。去年は、ヤマミツの巣を買い取って、昔ながらの方法で蜜を取り、今年は焼きタケノコづくりをやり、大好評だった。
- ・ また、今から10年程前、阿蘇で全国から集まった大人たちで登山をやった。その人たちは「牛の糞があるところの周りの草は、青々していて、牛が食わないがなぜだ」「くぼ地があるが、何でだろうか」「風穴がいくつかあるが、なぜこれができるのか」という疑問を抱いた。
- ・ それに対し、その牧場の人は大体の話はできるが、学問的な説明をするのは苦手だと思って引っ込んでしまった。しかし、訪れる人はそういうことを知りたいと思っている。
- ・ 阿蘇の自然を研究した成果も発表されているので、自分の言葉で、地元の人が語れるようになっていただくと、地域に惚れ込み、地元への協力をする人が出てくるのではないか。

和田委員

- ・ 40年前の自分の草原に対する原風景というのを思い出してみても、きょうの議題の「草原再生を目指して」という再生の原点はいったい何処を目指すのかと、今日は非常に考えさせられた。一度総括して原点は何処なのかというのを、確認しなければいけない。我々が見ていた草原というのは、外輪山の壁を火がつたって上るような野焼きの姿である。
- ・ 阿蘇ネイチャーランドという自然体験会社を共同でやっているが、修学旅行生が年間7,000名、一般のお客さんも同じような数の利用がある。5年ぐらいもつかないと思っていたら、なんとか毎年増えて来て、今期初めて営業黒字が出るようになった。産業として成り立つのではないかという気が今している。
- ・ ただ、観光客のお客様は草原を、景観としてしか見ていない。阿蘇の観光は大変苦慮しているが、いろいろなルールが作られていたり、窓口が1本化される中で、草原利用を含めた各種自然体験等が、阿蘇でこそできる地域の産業として成り立っていくよう、皆様のご協力をお願いしたい。

空野委員

- ・ 草原を守るため、阿蘇では野焼きが歴史的な行事という形で残されている。しかし、昔からのやり方ができなくなっていることで、草が守りづらくなっていることを、今日お伺いした。夕方から火を付けて9時ごろまでやった野焼きが、今は消防法によってできなくなっているとのことだが、私はそれが一番の問題だと思う。
- ・ そういった問題を取り払うため、構造改革とか規制緩和とかで、また元に戻していくようなことも考えないといけない。

草野委員

- ・ 冷蔵庫や自転車などが捨ててあるというお話もあったが、阿蘇の管内では野積みされている車もある。そうした景観や環境を阻害している要因を取り除くだけでも、阿蘇は生き生きとするのではないかな。
- ・ 地域へのメリットをどういった形で生み出していくのかが、大きなポイントだと思う。例えば、白水村に一心行の桜があり、開花の時期に約30万人の方が1本の桜を見に来る。地域の方はお店を作ったり、駐車場のお金をもらったり、経済的なメリットを生み出すシステムを自ら考えておられる。
- ・ しかし、儲けだけを追求すれば、いずれは飽きられてしまうということもある。したがって、あの桜の木はやはり阿蘇地域にとって大きな宝だと思うので、その宝を見てもらうことによって都市の人とお話をするとか、1本の桜の木を介していろいろな話が深まるとか、そういう精神的なものが今後とも重要ではないかな。

参加者A

- ・ 小学校のころは草原で、小さい牛の子、馬の子を連れて走って回り、非常にのどかな感じだった。ところが、時代の流れにより原野も変わって、野焼きもしていない、牛もいない状況になってきた。これから先の原野をいかに維持管理していくか、それが一番の悩みだ。
- ・ しかしこの前、京都の修学旅行生から「草原でたこを揚げさせてくれないか」と打診を受

けた承した。男女 40 人で力を合わせて、大きなロープで 8 畳だこを揚げて、喜ばれた。その生徒から、「あんなにいい修学旅行は、一生忘れることができません。結婚するならば阿蘇に嫁に行きたい」というお手紙が届いた。

- ・ 原野を訪れた方は、日本の方でも外国の方でもいい所だと言ってくれるので、命の洗濯で喜ばれるなら、原野を守ったかいがあると思う。

参加者 B

- ・ 問題は、観光産業に携わっている方と地元で農業に携わっている方との交流が、全然できていないことだ。
- ・ 例えば、草原でのゴミ問題を一緒に体験する。一方で、今度は農家の人も観光産業に携わって、今阿蘇にはどのような人たちが来ていて、観光産業の方はこういう苦労をしている、ということを知る。そういう交流が、原点として必要ではないか。
- ・ そして、一番問題なのは環境汚染や環境破壊で、今のうちに本当に対応していかないと大変な問題になると思う。
- ・ 先祖から受け継いだ財産を私たちが、好き嫌いではなく、とにかく守る。先祖から受け継いだ遺産を絶対に守って、そして継承していくというのを義務付けられているのが、われわれ阿蘇の住民であると思っている。



山本氏

- ・ 分科会のほうでいろいろなお話を聞いて、私がいろいろな各地でお聞きしている問題と似ているものと、阿蘇だけの特有な問題があると思った。
- ・ ほとんど解決できることだなと思ったことは、ルール化の部分で、ゴミ問題は論外の話であり、環境保全や自然保護等の観点からルールを設けて対処していけばよいことだ。
- ・ 牧野に人を受け入れたくないという方もいらっしゃるが、これも当然のことである。普段のきつい仕事の上にまたきつい仕事が増えるような感じの受け入れだったら、やめたほうがいい。しかし、それを超える分の満足感が皆さんに得られるのであれば、私は大いに勧めたい。
- ・ 交流の推進によって地域が活性化したとよく言われるが、わかりやすく言うと役割分担によって家族が仲良くなった、話をするようになった、おじいちゃん目が生き生きとしてきたということで、数え上げれば切りがない。
- ・ 事前学習については、平成 14 年 4 月からの教育改革の中で、学校は事前学習をやれるようになった。農家の方が「うちの息子より、都会から来た小学生のほうがよく理解して質問が専門的だった」というぐらいになっている。今は事前の調べ学習、事後のまとめ、振り返りもきっちり組み込まれている。
- ・ 年配の方は名人、達人の宝庫である。その人たちが、観光客や子どもさんたちに「すげー」と言われると目が光ってくる。最初は「おれは人前では話せない」と言っていた人が、無理やり 1 回 2 回やらせると、3 回目ぐらいには「次はどここの学校がいつ来るんだ」ということをおっしゃる方も出てくるので、ぜひ、地域全体で取り組んでいただければと思う。

宮口委員

- ・ 阿蘇は純粋な自然ではない。阿蘇は、草原を人が飯の種にしてきたというところに、一番価値を感じる。その飯の種にしてきた農業が難しくなってきたが、今日の分科会では「いろいろと工夫してやっていたら、農業としては成り立つ」という発言があった。ただ、それでも後継者がいない。それは、ここで牛を飼って生きる暮らしが、次の世代にとってしやれた暮らしに見えなかったからで、これはお金の問題で解消できることではない。
- ・ 私は10年以上、大学のゼミの学生を青森県のリンゴの村へ連れて行って、泊めてもらって、リンゴの作業をさせている。5年ぐらいたったころから、その村には後継者が戻ってくるようになった。
- ・ 要するに、早稲田の学生が来て、うちのおやじたちと話して何かやり取りしているらしい。それは東京へ出て行った地元の若者にとって不思議なことだったわけで、帰ってきてみると、親は「リンゴはこうやってできる」と学生に威張って教えている。それを見て、実際後継者がよく帰ってくるようになり、今は若い世代が学生を預かってきている。
- ・ そういうふうに、やはり他人が「いいな」と言って来ていると、やはりその子どもたちにとってもよく見えてくるようなことがある。牧野組合にはいろいろ難しい仕組みがあると思うが、阿蘇なりの工夫を考えてもらいたい。
- ・ 今日は体験という言葉がたくさん出てきたが、体験だけがグリーンツーリズムではないということも知ってもらいたい。いい大人が、ゆっくり滞在しておいしい物を食べて風景を眺めて、たまにはお金をいっぱい使いたいという人もいるわけで、そういう人にも来てもらわないといけない。体験だけを拠り所とすると、ちょっと価値が低くなる。
- ・ 地産地消は、人・物が循環する中で、経済的な付加価値が生まれること、自分たちの取り組みがちゃんとあることが必要だが、これはやはり縁づくりだと思う。農業をやる人、そこを訪れる人、観光業者など、いろいろな立場の人がいろいろな縁を結んで、その間に仕事生まれ物やお金が行き来する。これが、地産地消である。そのためには、交流ということが非常に大事になるが、福岡、熊本ぐらいまでは仲間にしていいのではないかなと思う。
- ・ いろいろな規制があって昔流のやり方がやれないことについては、最近は特区もあるし、阿蘇発の新しい制度作りみたいなことを世間に働きかけてもいい。日本に1つしかない場所だから、ほかでは通用しない仕組みを考えてもよいのではないかな。

坂元委員

- ・ 今日は「草原再生を支える都市・農村の交流を考える」という全体テーマで意見交換会を行った。第2分科会で、一人の牧野組合の方から「自分たちの草原だから、自分たちは守るんだ」という言葉をいただいた。この言葉から、先祖から受け継いできたものだという重み分かるし、一方で地元のメリットを生み出す仕組みを考えていくことも大事なことだと思う。そういう意味では、草原は本当に宝物だという共通認識を持って、都市・農村交流に取り組んでいく必要があるのではないかなと感じた。
- ・ 地産地消という大きな構図を踏まえた上で、阿蘇の草原と連動した交流の在り方が発展していったらいいのではないかな。大きな目を見た阿蘇の交流、阿蘇の草原再生の仕組みづくりがこれから必要ではないかなと思う。

懇親会

全体会に引き続き、昼食会を兼ねて懇親会が開催された。昼食会には「レストラン燦」からあか牛料理が提供された。料理に使用された食材のほとんどは、地産地消を意識し、阿蘇産のものとした。

(料理一覧)

薬膳カレー／根子岳（薄切り肉の炒め物）／ハンバーグ／牛のたたき／豆腐をとらないおから
／冠婚葬祭にかかせない煮しめ／昔ながらのお漬物／薬膳茶



牛のたたき



ハンバーグ



煮しめ



おから

また、情報発信の一環として、関係団体のポスター、チラシの掲示、配布及び各団体からの活動PRなどが行われた。

(掲載ポスター、配布チラシ・雑誌等一覧)

農花の会、畑暦	ネイチャーランドポスター
農家れすとらん田子山	エコツーリズム大会 in 阿蘇ポスター
さわやかビーフ関連	雑誌「ジパング倶楽部 2003. 10」
阿蘇だより	小国遊学
野外教育研究所 IOE、コミネット協会活動関連	小国自然学校



←「農花の会」佐藤さん

↓「レストラン燦」村上さん



「阿蘇地域デザインセンター」坂元事務局長 ↑



「野外教育研究所 IOE」山口代表 ↑

【参考】参加者の感想

参加者全員にアンケート票を配布し、「興味を持った話題」「会議で言い残したこと」「草原再生について」「会の開催方法・進め方」などの意見を聞いた。その結果を以下に整理した。

○興味を持った話題（抜粋）

畜産を取り巻く状況に対する地元牧野組合員の意見

- ・ 「消費者、都会人は草原に来なくてよい。草原が荒れるだけ」「行政こそ牧野、畜産の衰退に責任あり」という農家の意見に特異性があった。
- ・ 「政策が拡大造林→草地改良→自然再生と流れていく。地域で安心して暮らしていけるための構造政策が必要だ」というハードな批判に心動かされた。

昔の野焼きの方法

- ・ 野焼きの基本的な知識は知っていましたが、雪焼き、夜焼きについて初めて知りました。

交流や情報発信

- ・ 表面的ではない、根まで深く交流できる都市と農村のつながりが一番必要だと感じました。
- ・ 個人でも阿蘇のことを何らかの形で周りの人達に伝え発信して行く必要性を感じました。
- ・ 阿蘇の中でネットワークが出来つつあることを知り力強くなりました。

地産地消

- ・ 地産地食が直接結びつくとな農家も張り合いができるし消費者も元気で安全な食が得られることが出来ていいと思う。

○今後の取り組みへの意見・アドバイス（抜粋）

資源の掘り起こし

- ・ 阿蘇にはまだまだ隠れた観光資源があり、出来れば掘り起こしていかなければと思います。

省力化

- ・ ラジコンの草刈り機を町村が購入（国、県の補助）し、牧野に貸し出す。アタッチメントを変えることにより集草もできるのではないかな。

牧野の利用について

- ・ ルールがまとまれば牧野を貸しても良いと言う牧野から進めて行かねば事は進まない。ニーズの変化に応えるための話し合いや協議を進めて行く必要がある。西小関牧野などのように触れ合い牧場的な小動物を飼育すれば面白い。春のワラビ刈りツアー等も考えては。
- ・ ウォーキング、トレッキング、ハイキングなど、ひと・馬・自転車が恒常的に「輪地」＝草の道を活用することで、そのルート内の草地は次世代に残ると思う。
- ・ 「草泊まり」山で竹や柱や茅や土など自ら材を集め、建てる、楽しむプログラムを。

○会の開催方法などについて（抜粋）

- ・ このよう会議をもっともっと繰り返し行い、”阿蘇草原保全”だけでなく、互いのこと”人”を知ることで、全てのバランスが保って行けるのではないかと思います。
- ・ グランドビジョンの上に、種々の意見を出し合い、地元総意の上に、熱い熱意を阿蘇から生み出せる方向にする為にも、このような意見交換の場が必要であろうと思いました。
- ・ 若い人が少なかったですね。残念です。
- ・ 「草原の存在意義」を今あらためて意見を集約し定義づけをしないと、曖昧なままに、常識論で終わってしまうのではないかな。
- ・ 9時30分開始は、市内から来る人にとっては早すぎる。30分遅れで開始した方がよい。

○その他（抜粋）

- ・ それぞれの分野の方が草原のことを考えて何かしなければと言う意気込みを感じました。今日は昼食に惹かれて来ましたが、来てみて本当に良かったと思います。
- ・ 草原が維持されることに大変な労力と費用が掛かることを、もっと多くの人を知るべきだと思う。

第1回 情報発信・合意形成に関する検討部会議事要旨

日時：平成15年12月12日（金）10:00～12:00

場所：阿蘇いこいの村会議室

（1）阿蘇における草原再生と当検討部会の進め方について

- ・ 阿蘇での草原再生に関する取り組みは、自然再生や農業を支援するシステムのあり方を検討する上で、象徴的な大きなテーマ。外からの知恵を集めていくためにも、情報発信は重要な役割を果たす。そういう意味で、草原利用と環境教育がメインに掲げられているのは、少し物足りない気がする。
- ・ 言葉の使い方に十分注意し、現場で悩みをかかえている人々が納得し参加できるような事業の進め方を望む。草原の維持・保全や利活用に関するこれまでの取り組みを検証してみることも必要。

（2）草原利用・環境教育等の推進に関する基本的考え方について

<阿蘇の草原の価値と交流の意味>

- ・ 阿蘇の草原の魅力は農家の人が牛を飼って、その営みを通じて他に類を見ない自然が維持されている点にある。人が関わっているからこそ、阿蘇の自然が成立していることを原点とすべき。
- ・ モーモー輪地切りの例でわかるように、土地をうまく利用するには、地元からの発想に加え、外からの知恵が必要だと思う。
- ・ 草原の価値を住民の人が認識し、誇りを持つ人が増えれば、阿蘇は自然と活性化する。ただし、住民だけの力ではいろいろな取り組みは不可能であり、これからは行政や研究者などとの連携に基づいた農業が必要となっている。

<草原の利用>

- ・ 草原を体験してもらうことによって、草原維持のための合意形成を図っていきたい。
- ・ 自然体験学習の民間会社で一番人気のあるプログラムは、草原の中をマウンテンバイクで走ること。草原をもっと活用したいが、牛を飼育している場でもあり、色々な課題もある。草原を活用したモニターツアーについては、ビジネスに発展するような取り組みを望む。
- ・ 人に紹介することによって、当たり前とっていたことの価値を気づかされるもの。エコツアーなどの取り組みを継続させていくことはそのような意味もある。草原に入るための注意事項や留意点などを検討し、草原を歩くルート・ルールを決めることで牧野組合との合意形成が図られれば、エコツーリズムを推進できると思う。また、単なる自然観察を超えて、どう阿蘇の魅力を提供していくのかも課題である。
- ・ 草原を案内する人や牧野を提供した人にお金落ちるなど、直接、地元の人に利益が出るしくみがあると受け入れやすくなる。

<環境教育の進め方>

- ・ 環境教育のターゲットをはっきりと決めて、資料は分かりやすいものにすることが必要。
- ・ 環境教育については、草原は牧野組合の人達をはじめ人々の営みがあってこそ維持されていることを掘り下げて欲しい。農業教育など、もう少し具体的な目標に絞り、草原だけでなく集落・地域の農業や畜産業への理解を深めてもらいたい。
- ・ 環境教育の推進に関しては、自然案内人協会や畜産農家、牧野組合の方々との連携が必要と思っている。

(3) 情報発信と共有について

- ・ 利用とともに草原を維持するための情報を、同時進行的に発信する必要がある。
- ・ 地元に誇りを持った人を増やすためには、外との交流が不可欠。地元の人々の誇りや意識を高揚させるには、シンポジウムのような形式だけでなく、じっくり情報交換をすることが必要。
- ・ 情報発信にあたっては、受け手の側の立場や意識などに配慮した内容、表現としたい。

第2回 情報発信・合意形成に関する検討部会／拡大意見交換会
「草原再生を支える都市・農村交流に向けて」議事要旨

日 時：平成16年2月25日（水）9：30～12：30

場 所：ホテルサンクラウン大阿蘇 会議室

第1部 基調報告

「農山村の人間論的価値と阿蘇の魅力」／早稲田大学教育学部教授 宮口侗迪氏

「自然案内人が伝える阿蘇の草原と文化」／阿蘇自然案内人協会会長 高橋佳也氏

第2部 交流分科会

第1分科会「都市・農村交流の推進と草原再生に向けた情報発信」

(1) 報告

「地産地消を軸とした都市・農村交流への期待」／阿蘇フォーラム事務局長 宮本孝志氏

『阿蘇ファン』づくりの試みと反響」／阿蘇テレワークセンター所長 高野勝則氏

「ファームステイを受け入れて」／農家レストラン・民泊経営者 小野聖子氏

(2) 意見交換会

<都市・農村交流について>

- ・ 子供の頃から農村と交流し、子供の頃から都市と農村のつながりを認識させることが必要だ。
- ・ 阿蘇の価値、阿蘇の見せ方は、外からではなく内からの発想や知恵から生まれるものだ。外からお客さんをたくさん呼び込み、どうお金を落とさせるのかを考えるというより、地元で取り組んでいる人たちをどう応援していくかという視点が欲しい。
- ・ 阿蘇での過ごし方の満足度を高めて、繰り返し来てもらい、ゆったりと過ごしてもらい、感動してもらえば、観光客の数は減っても良い。
- ・ まずは農業の現場をお客さんに見てもらい、野菜など食物への理解を深めてもらいたい。
- ・ 修学旅行生の受け入れでは、事前学習をしてくる子供としてこない子供とでは子供の意欲、理解度が全く違うので、ぜひ、来る側は事前学習をきちんとしてきて欲しい。
- ・ 今後はファームステイ受け入れ農家の過重な負担にならないように、子供たちが伸び伸びと体験できるような「丸ごと農家体験」の時間と場所の提供も必要だ。

<情報発信について>

- ・ 地域再生や草原・環境問題を子供たちに上手く伝えていくことが重要であり、小中学生向けの教材の開発や情報提供システムの構築が必要だ。
- ・ 阿蘇の下流域には、元気で何か貢献したいと思っているお年寄りが大勢いる。是非、その人たちに向けた情報発信のやり方を考えてもらいたい。
- ・ 情報は、村に住む人たちから発信しなければいけないと思う。そのためにも、住む人が誇りを持ち、役割があるということを考えながら暮らすことが重要だと思う。
- ・ 現場から情報発信するには、住んでいる人が阿蘇の良さを納得し、そしてそれを自分の

言葉で伝えることが大切である。

- ・ 情報発信も、地産地消を進めたい。地域の人がホームページの作成に携わり、地域活動と密着して、常に活動と連携した情報発信やコンテンツづくりをしなければならない。
- ・ 地域づくりにもコスト意識は必要。地域経営の観点から行政、営利団体、非営利団体による連携のしくみづくりが重要である。

第2分科会「都市・農村交流への牧野の活用とルールづくり」

(1) 報告

「環境学習提供者から見た阿蘇と草原利用への期待」／

(財) 全国修学旅行研究協会本部部長 山本精五氏

「牧野活用のための条件～全国エコツーリズム大会 in 阿蘇におけるトレッキングコース設定の事例から」／

阿蘇町ホテルの会会長 湯浅陸雄氏

(2) 意見交換会

<牧野の活用に関する牧野側の意向>

- ・ 草原への立ち入りに関しては、現在は牛の放牧をしていないので、全面的に開放している。私の牧野ではなるべく観光にいらした方を受け入れ、対応していきたいと思っている。
- ・ 私は畜産農家としては草地に人が入ることは一番嫌で、都市から人は来てほしくないと思っている。
- ・ 草原に入る観光客のゴミ処理、後始末などのマナーがあまりにひどく、バーベキュー用に持ち込んだ石で機械が損傷したこともあった。

<牧野の活用に関する観光業者側の意向>

- ・ 草原は観光客から景観としかみられていない。草原を体験の場として活用していくことが新たな阿蘇観光の1つの切り口になると思う。草原の再生に対し観光という観点からチャレンジしていきたい。

<牧野利用のルール・条件>

- ・ 問題は野草を採る方がいたり、牧野内にゴマシジミという貴重なチョウが生息しているが、それを捕る人があとをたたないこと。
- ・ 牧野組合として牧野を利用する時に守ってもらいたいことは、牛が逃げださないよう、牧野の門扉をきちんと閉めていくこと、車を乗り入れないこと、空き缶や空きびんなどをきちんと持ち帰ること、湿地には足を踏み込まないこと、牧場内に自生している植物などの採取をしないこと、などである。

<地域へのメリットの創出>

- ・ 牧野を利用させていただく上において、何らかのかたちでお礼をすることによって、牧野側にメリットを提供することも必要だ。
- ・ 修学旅行生に輪地焼き体験をさせ、充実した時を過ごすことができた。今回はボランティア

ィアだったが、組合員に対する資金面での援助ができるようになればよいと思った。

<地域側での教育や環境保全への取り組み>

- ・ 地元の人が地域のことを知り、かつ誇りを持てることが重要であり、感受性の強い小学生の頃から野焼きの見学・体験などをさせるべき。
- ・ 草原の谷間などに農業用資材や粗大ゴミが捨てられているのを見かけるが、農村の人々にも環境を大切にするという心構えが必要だ。

第3部 全体会

<草原再生について>

- ・ 40年前の自分の草原に対する原風景を思い出してみても、「草原再生」はいったい何処を目指すべきなのかと、今日は非常に考えさせられた。
- ・ 私たちの原野は農業法人にして、全部、個人の財産になっている。先祖からの遺産を自分たちの財産と考え、守り伝えていく義務があると思う。
- ・ 野焼きに関する昔からの知恵として、雪焼きや夜の野焼きがある。自然の理にかなっており、作業も楽で安全なやり方だった。ただし、夜の野焼きは今は消防法の許可が下りず、できない状態になっている。
- ・ いろいろな規制があって昔流のやり方がやれないことについては、特区などを利用し、阿蘇発の新しい制度作りを世間に働きかけてもいい。日本に1つしかない場所だから、ここでほかでは通用しない仕組みを考えてもよいのではないか。

<都市・農村交流について>

- ・ 草原は本当に宝物だという共通認識を持って、都市・農村交流に取り組んでいく必要がある。
- ・ 儲けだけを追求すれば、いずれは飽きられてしまう。都市の人と語り合うことにより、精神的な喜びを伴う交流を行うことが今後とも重要ではないか。
- ・ 問題は観光業者と地元の農業者間の交流がないことだ。共通の体験をしてみることから始めるべきではないか。
- ・ 地産地消は、人・物が循環する中で、経済的な付加価値が生まれること、自分たちの取り組みがちゃんとあることが必要だが、これはやはり縁づくりだと思う。農業をやる人、そこを訪れる人、観光業者など、いろいろな立場の人がいろいろな縁を結んで、その間に物やお金が行き来する。そのためには、交流ということが非常に大事になるが、福岡、熊本ぐらいまでは仲間にしていいのではないか。

<草原を利用した自然体験・エコツアー等について>

- ・ ゴミ捨て問題は論外の話であり、環境保全や自然保護等の観点からルールを設けて対処していくべき。
- ・ 受け入れ態勢、窓口の一本化を望む。そこで、体験のツールの作成からインストラクターの手配、農村民泊の配宿、安全管理の面までやっていただいたほうが、送客側の支持はより高まるし、成功する。

- 年配の方は名人、達人の宝庫である。その人たちが、観光客や子どもさんたちに「すごい」と言われると目が光ってくる。ぜひ、取り組んで欲しい。